



【作者】正岡子規（一八六七～一九〇二年）慶応三年、松山に生まれる。明治の詩人。本名常規。号子規。松山中学中退、上京し、

夏目漱石を知る。明治二十三年、東京帝国大学国文科に進み、二十六年、退学、根岸に居住し、俳句に専心、数多くの随筆著作を発表した。この間、日本新聞社に入社し創作活動を展開。日清戦争に従軍記者として参加後、再び咯血、病床で

文学に専念。写生の理論をたて、俳誌『ホトトギス』を編集。二十九年以降万葉調野写生歌をす主張するなど活躍した。

俳句は高浜虚子。河東碧梧桐。短歌は伊藤左千夫。長塚節らに受け継がれた。明治三十五年、没。三十六歳。

【語釈】*子規：…体長二八cm位で、尾羽が長く夏の鳥として親しまれている。*孤月：…一輪の月 *啼血：…痛切な啼き声。

*不堪：…たえられない。 *半夜：…夜半・真夜中

【通釈】子規が自ら子規というテーマで作った詩。

ほととぎすの啼き声が、血を吐くように一声、聞くに堪えないように、痛切にひびく。旅人は夜半目を覚まして、はるか故郷を思う。